

小学校英語教育における Small Talk の役割

— 教員研修における意識調査結果の一考察 —

The Role of Small Talk in English Teaching at Elementary Schools in Japan

— Reflections and Feedback after In-service Teacher Training —

前田 隆子

MAEDA Takako

要 旨

2020（令和2）年度から小学校での教科としての外国語（英語）の導入が開始されたが、いまだ自身の英語力に不安を抱える小学校教員は多い。本論では、明海大学が実施した教員研修の中の Small Talk に焦点をあてて、小学校英語教育における Small Talk の役割を考察した。その手法は、筆者が講師を務めた研修の内容と受講者である小学校教員のリフレクションシート、事後アンケート、感想の質的分析である。その結果、受講者は対話方略を活用して、既習表現の定着を図り、対話をより長く続けられるように指導することの重要性を認識したことが分かった。

キーワード：小学校英語 Small Talk 教員研修

1. はじめに

2011（平成23）年度に小学校5・6年生に週1コマの外国語（英語）活動が必修化されて以来、約10年が経過した。チェン・村上（2013）によると、2011年当時の小学校の教員が不安に思う点として、英語力そのものや発音などが挙げられていた。その後2019（令和元）年夏にイーオンが実施した調査によると、課題として感じている点の第1位は「児童の評価の仕方」であったが、第2位は「自身の英語指導力」、そして第3位は「自身の英語力」とあり、依然として英語に対して大きな不安を抱えている。そこでそのような不安の軽減と指導力向上のためには、教員研修が重要となる。

明海大学は、文部科学省（以下、「文科省」と記

す）の「令和2年度教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（以下、「明海大学での小学校教員研修」と記す）」を受託し、東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市の教育委員会と連携し、小学校教員向けの研修をオンラインで実施した。その際、筆者は第3回講座「Small Talk の実際とデジタル教科書への接続」の講師を務めた。そこで本論では、その研修の内容と受講者のリフレクションシート、事後アンケート、感想を通して、小学校英語教育における Small Talk の役割を考察したい。

2. Small Talk とは何か

2.1 中学校英語教育における Small Talk

Small Talk とは、一般的には「世間話、雑談」と

いう意味で使用されるが、英語教育においては、「教師が生徒にとって身近な話題 (here and now) や関心を持ちそうな話題について英語で話すこと。授業開始時のウォーミング・アップとして行われることが多い。教師が英語で話し始めることによって、日本語モードから英語モードに切り替えることを促す効果や、英語を聞いて理解する姿勢と能力を育てる効果がある。」と言われている。(白畑他, 2019, pp.274-275) この記述は、「生徒にとって」とあるように、中高生を対象にした Small Talk の定義であることがわかる。中学校の英語教育における Small Talk の実践の一例は、日吉 (2017) のアクション・リサーチに見られる。彼は勤務校の中学生を対象に、英語の発信力を育成する目的で、即興的な発話の機会を設定するために教師が行なった Small Talk を生徒に Story Retelling させる手法を使った。その結果、生徒が十分に教師の Small Talk の内容を理解し、その内容を再生する発話を身につけた様子を報告している。

2.2 小学校英語教育における Small Talk

2.1 で述べた白畑らの定義による Small Talk の実践は、英語を専門的に学んでいるわけではない小学校教員にとってはハードルがかなり高いと思われる。では、小学校ではどのような Small Talk の実践がなされているのだろうか。内山・染谷 (2019) の授業実践では、児童の動機づけを高めるために、Small Talk を活用した。まず朝の会における「先生の話」の時間に、担任が Small Talk の内容を日本語で話し、その後の外国語活動の時間に JTL (Japanese Teacher of Language) との TT (Team Teaching) の際に、同じ内容を担任と JTL が英語で話すようにした。その際に、言語材料や背景知識がまだ豊富ではない児童が理解しやすいように、ジェスチャーをしたり、黒板に絵を描いたり、写真も見せるという工夫も行なっている。その後、児童へのアンケート調査を分析した結果、Small Talk

は児童の授業への内発的動機づけを高める効果があると結論づけている。

また、疋田・田中 (2018) らは、児童が主体的に英語でコミュニケーションを図る授業づくりを目指して、自分の思いを伝え合うための言語活動の設定の一部に Small Talk を取り入れ、既習表現や対話を続けるための基本的な表現の定着を図った。

これらの先行研究に見られるように、Small Talk の実践を積み重ねている教員もいるが、実際には多くの小学校教員が英語で対話を続ける Small Talk に苦手意識を持っているのも事実である。これは前述のイーオン (2019) の調査結果に見られた、263 人の回答者 (複数回答あり) の中の約 6 割にあたる 155 人が「自身の英語力」が課題であると感じていることからわかる。

では、文科省は小学校の英語教育における Small Talk をどのように位置づけているのであろうか。『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』(文部科学省, 平成 29 (2017) 年, p.130, 以下「文科省のガイドブック」と記す) には、「Small Talk とは、高学年新教材で設定されている活動である。2 時間に 1 回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。また、5 年生は指導者の話を聞くことを中心に、6 年生はペアで伝え合うことを中心に行う。」とある。5 年生では指導者の話を聞くという意味では、「インプット型 Small Talk」と言え、語彙や表現に慣れてきた 6 年生ではペアでやり取りするので、「アウトプット型 Small Talk」と言えるであろう。

また同ガイドブックでは、Small Talk を行なう主な目的として、(1)既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、(2)対話の続け方を指導すること (p.84)、の 2 点を挙げている。つまりこの 2 点が Small Talk の役割であると言える。(1)の既習表現の定着に関しては、2017 (平成 29) 年 3 月に告示された『小学校学習指導要領 (外国

語)』の指導計画の作成と内容の取り扱いの項に、「簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること。」(p.162)とあることから、授業の様々な場面で「既習表現の定着」を意識した指導を行なうべきなのだ。これを可能とする一つの手法が、既習表現を繰り返し聞かせたり、実際のやり取りで使わせたりする Small Talk なのである。

2.3 Small Talk における対話方略

文科省のガイドブックでは、前述の Small Talk を行なう主な目的(2)の対話を続ける際に必要な対話方略として、①対話の開始、②繰り返し、③一言感想、④確かめ、⑤さらに質問、⑥対話の終了の6点が挙げられ、解説している (p.84)。

まず、①「対話の開始」は、対話を始める際のあいさつのことである。“Hello. How are you?”のような日頃授業の開始で使っているあいさつのことだ。次に②「繰り返し」とは、相手の話した内容の中心となる語句や文を繰り返して確かめることである。例えば、相手が“I want to play baseball.”と言ったら、“Oh, baseball.”とか“Oh, you want to play baseball.”と返せばよい。③「一言感想」は、相手の話した内容に対して、自分の感想を簡単に述べ、内容を理解していることを伝えることだ。“That’s good!”, “That’s nice!”, “Really?”などが使える。④「確かめ」は、相手の話した内容が聞き取れなかった場合に、“Pardon?”や“Once more please.”などと言って、相手に再度発話を促すことである。⑤「さらに質問」は相手の話した内容についてより詳しく知るために内容に関わる質問をすることだ。例えば相手が“I like animals.”と言ったら、“What animal do you like?”とさらに掘り下げて聞くと会話が続く。⑥「対話の終了」は対話の終わりのあいさつで、“Nice talking to you.”などと言って、「話ができて楽しかった」という気持ちを伝えることだ。

3. 明海大学での小学校教員研修で実施したこと

3.1 第3回講座の Small Talk に関する研修内容の概要

第3回講座は、「Small Talk の実際とデジタル教科書への接続」と題して2人の講師で研修を行なったが、ここでは筆者が中心となって行なった Small Talk に関する研修内容のみに特化して記述する。

まずこの講座では、「Small Talk の目的や留意点を学び、単元目標と関連した効果的な Small Talk ができるようになる。」ことを目標とした。研修の大きな流れとしては、(1)Small Talk とは何か、(2)文科省チャンネル (YouTube) より Small Talk の実践事例を視聴し、どのような工夫がなされているか考察する、(3)明海大学の教職課程履修中の学生に教師役と児童役を割り当て、Small Talk についての指導をする前と指導後でどのような変化が起こったか解説する、(4)研修講師が対話方略を活用して実際に模擬授業を行なう、(5)受講生である小学校教員に実際に Small Talk に挑戦してもらい、というものであった。3.2 でその内容を詳述する。

3.2 研修内容の詳細

3.2.1 Small Talk とは何か

まず、文科省のガイドブックで示された Small Talk の定義と対話方略を説明した。特に対話方略に関しては具体例を含めより丁寧に解説することを心がけ、この後視聴する動画や研修講師の模擬授業においても、どの部分でどの方略が使用されているのかを具体的に解説した。そのことで受講者である小学校の教員たちも「対話方略」に意識が向くようになったようだ。それは例えば、研修後のリフレクションシートの以下表1にある記述に見られる。

またこの講座においては Small Talk だけでなく、できるだけ対話を続けるための方法として、沈黙や間をつなぐ “Well,…”、や “Let me see,…”

表1 Small Talk に関する学び

- ・「対話方略」という新しい用語とその内容を学び、Small Talk を長く続けさせるための手立てとして使えることが分かった。
- ・Small Talk を行うことで児童に英語を使うことに慣れさせるとともに、表現の定着を目指すことが大切であることを学んだ。児童が積極的に Small Talk を行うためには、教師が対話方略を駆使して児童が「話したい」と思える対話を用意することが大切であることがわかった。
- ・普段 ALT との話が長続きせず気まずかったが、繰り返しや一言感想のテクニックを活用したい。

(受講生のリフレクションシートより)

等の filler の使用や、疑問詞を使って質問する、分からない単語は日本語のまま言う、できるだけ具体例を挙げて話す、等の手法も紹介した。

3.2.2 文科省チャンネル (YouTube) の Small Talk の実践事例を視聴

次に文科省チャンネル (YouTube) で宮崎市立赤江小学校の岩切宏樹先生と ALT の Jake Siebuhr 先生の授業の中の Small Talk の部分を視聴し、どのような工夫が見られたかを解説した。このビデオでは対話方略の活用のみならず、季節の話から入り、写真や絵カードを多用し視覚的な理解を促していた。さらに、児童に発話を促す際も質問形式だけでなく、ヒントを出したり、あえてポーズを置くことでも児童が答えている点も実際の授業で活用できるポイントである。

3.2.3 明海大学学生の Small Talk についての指導の前後での変化

まず講座開始以前に、明海大学において教職課程を履修している2年生に教師役と児童役を割り当て、Small Talk を中心とした模擬授業の冒頭部を撮影した。最初に Small Talk についてはまだあまり理解が進んでいない状態で、教師が毎朝行なって

いることを英語で話し、その後児童に普段朝食に何を食べているかをペアで話をさせるというものだ。

その後、教師役の学生に、(1)対話方略の「繰り返し」、「確かめ」、「一言感想」を入れること、(2)児童と楽しくやり取りできるように、教師の朝食の内容をゲーム形式で児童に当てさせる、(3)ジェスチャーは大きめに、(4)難しい単語は既出であっても復習する、の4点に注意するように指導した。その結果、指導前は対話方略の使用はあまり見られず、教師が一方的に英語を話し、児童とのやり取りがほとんどなかった Small Talk だったが、指導後は対話方略が使えるようになり、児童の発話も引き出せるようになった。

この指導前後での授業の変容をビデオで視聴した受講生たちの中には、「Small Talk で使う表現を提示するときには、一方的になってしまわないように児童を巻き込んだ場面作りが大切だと学んだので、ALT が言ったことを問い直してみたり、確認したりしていこうと思う。」とリフレクションシートに記載した人もおり、教師が一方的に話すのではなく、児童が教師の話す英語に集中できるように対話方略を活用する意識が高まったようだ。

3.2.4 研修講師が対話方略を活用して実際に模擬授業を実施

次に担任一人で授業を行なうことを想定して、研修講師(筆者)が *We Can! 2* の Unit 8: What do you want to be? をテーマに模擬授業を行なった。ここでは、筆者が子どもの頃に琴を習っていたエピソードを使用し、対話方略を活用しながら Small Talk の展開例を示した。展開の一部を以下表2に示す。

このように模擬授業で Small Talk を実際に示し、その後授業内で使用された対話方略を解説した。約3分の実践であったが、4種類の対話方略が使用できることを示した。

表 2 研修で使った Small Talk の一例

Teacher (以下:T): (筆者が子ども時代に琴を演奏する写真を提示する。) When I was six years old, I practiced playing the koto (琴). (既習事項である過去を表す表現を使用し, 定着を図る。)

T: Do you know a “koto”? 【対話方略: 質問】

Student (以下:S): お琴?

T: That’s right. It is a Japanese musical instrument.
Look at this picture. (琴の写真を提示する。)

T: How many strings are there on the koto? 【対話方略: 質問】 (履修事項の「数を聞く」の確認)
How many strings are there on the koto? 【対話方略: (ゆっくり) 繰り返し】

T: Do you know strings? (ジェスチャーで示す。) 【対話方略: さらに質問】
The guitar has six strings. (ヒントを与える。)

S: ああ, 弦だ!

T: Yes. Strings are called 弦 in Japanese. (再度琴の写真を提示し, 一緒に弦の数を確認する。)

T: There are 13 strings on the koto. Please repeat after me. There are 13 strings on the koto.

S: There are 13 strings on the koto.

T: Very good. 【対話方略: 一言感想】

T: I liked the sound of the koto, so I wanted to be a koto player at that time.
What do you want to be in the future? Let’s talk about it with your partner.

【 】内に対話方略を, () にその他の工夫を示す。

3.2.5 受講生である小学校教員の Small Talk

への挑戦

講座の最後に「チャレンジ・タイム」と称し, 講座前タスクとして示していた2つのテーマ (*We Can! 1* の Unit 8: What would you like? もしくは *We Can! 2* の Unit 4: I like my town.) のいずれかで, 受講生に Small Talk に挑戦してもらった。まずはそれぞれの拠点校で受講生がペアになって披露し合い, その後代表にビデオの前で講師を児童役に見立てて Small Talk をしてもらった。全ての教員が対話方略をうまく使いこなしており, 「繰り返し」, 「確認」, 「質問」, 「さらに質問」が使用できていたが, 「一言感想」はほとんど使用されなかった。この「一言感想」は瞬時の反応力と語彙力を必要とするので, 難しかったと思われる。しかし, 教室英語で使用される「褒め言葉」を活用し, 「一言感想」とすれば対話がより長く続くようになり, その上自分の気持ちを伝えることでよりよいコミュニケーションを取ることができるようになる。

4. 受講者の意識調査からの考察

4.1 事後アンケート調査より

本講座の受講生の属性を外国語(活動)指導経験年数で見ると, 0~3年が33%, 4~6年が30%, 7~9年が24%, 10年以上が13%と, 経験年数の浅い教員から中堅, およびベテランの教員まで様々であった。

「講座内容が学校現場のニーズに合っていたか」という質問に対しては, 「とてもそう思う」が48%, 「まあそう思う」が46%と, 肯定的な意見がほとんどを占めた。この結果は裏を返せば, 第3回講座のテーマであった Small Talk やデジタル教科書に対して, 日頃から不安感や苦手意識を持っている受講者が多かったと言えるであろう。

講座内容の難易度に関しては, 86%が「適切だった」と回答しているが, 一方で「少し難しすぎた」が10%, 「難しすぎた」が2%とあり, より丁寧な説明や解説を必要とする受講生が1割程度いたこと

がわかった。

講座の満足度に関しては、「とてもそう思う」が36%。「まあそう思う」が56%となり、9割以上の受講生が肯定的な意見が示した。

4.2 リフレクションシートより

研修終了後は、受講生が学びを客観的に振り返り、自身の授業改善に繋げることを目指して、①講座を受講して新しく学んだことや気づいたこと、②今後の授業において活用したいことに関してリフレクションシートに記載してもらった。

まず、「①講座を受講して新しく学んだことや気づいたこと」に関するコメントを読むと、以下表3のように認識を高めた教員が複数いたことがわかった。

表3 講座受講後に高まった認識

- ・児童が積極的に Small Talk を行うためには、教師が対話方略を駆使して児童が「話したい」と思える対話を用意することが大切であることがわかった。
- ・Small Talk の最初の一步は相槌、アイコンタクト、スマイルである。繰り返しインプットすることで、子供たち同士の Small Talk で既習表現が使えるようになっていく。
- ・やり取りを繰り返し行なうことが大切だということも、定着させるために必要だとわかった。
- ・「対話方略」という新しい用語とその内容を学び、Small Talk を長く続けさせるための手立てとして使えることがわかった。
- ・写真や絵カードを使い視覚的に捉えさせることが大切であることを再認識した。

対話方略の重要性とともに、相槌やアイコンタクトなどのコミュニケーションをより良く図る手段や、写真や絵カードなどの視覚的な補助教材を使用することも改めて重要であることを認識できている。

また一方で、自らの授業を振り返り、「Small Talk をめあてや題材と結びつけることへの意識が足りないことを認識した。」という反省点を述べて

いる教員も見られた。これは、柏崎 (2008. P.36) が言うところのメタ認知能力の高い省察できる教師と言えるであろう。

次に、「②今後の授業において活用したいこと」を読むと、圧倒的に「対話方略を活用したい」という声が多かったので、講座の目標は達成できたと言える。中には、「成功体験が積み重なることで子供たちも外国語に楽しんで意欲的に取り組んでいくと思うので、中学校に向けて少しでも外国語を好きになってもらえるように専科教員と連携しながら工夫していきたいと思う。」というコメントに見られるように、小中連携を意識した教員もいた。以下表4にコメントを抜粋する。

表4 今後の授業において活用したいこと

- ・担任が一方的に話すのではなく、クイズや質問などの対話方略を使いながら児童が外国語に親しむようにする。
- ・会話がうまくつながっていかないときも、繰り返しや相槌を使いながら会話を続けていくことを実践したい。
- ・生活の中や他の授業の中でも既習の表現を多く使って子供たちが外国語の表現に慣れ親しんでいけるようにしたい。相槌をうつ言葉を吹き出しにして掲示するなど、会話を続けるための表現のインプット方法を工夫していきたい。
- ・Small Talk で会話を続けるコツを、児童にも分かるように掲示物などを作成して掲示する。
- ・Small Talk で使う表現を児童に提示するときには、一方的になってしまわないよう児童を巻き込んだ場面作りが大切だと学んだので、ALT が言ったことを受け、児童に問い直したり、確認をしたりしていこうと思う。また繰り返したり、一言感想を言ったりという取り組みやすい対話方略を使いたい。
- ・対話方略について頭の中では理解できたので、他の教員やALT相手に実践してみようと思う。
- ・高学年担任の教員に、対話方略について知らせ、実践現場などに立ち会ってアドバイスしていきたい。

上記の記述を分析すると、本講座で対話方略や相槌等の会話を継続するためのコツを学び、実際の授業で活用したいという声が多いことが分かる。ま

た、今回学んだ対話方略の内容を他の教員にも伝えたいという記述に見られるように、教師グループ全体で知識や経験を共有するという動きに繋がることは望ましいことだと思われる。

4.3 受講者の感想より

3 拠点の各教育委員会に提出された受講者の感想を読むと、講座での Small Talk に関する学びを授業に活用した結果や教員の意識の変化が読み取れた。以下表 5 に一部を抜粋する。

表 5 講座後の Small Talk の実践や教員の意識の変化

- ・(対話方略を)早速授業で取り入れてみたところ、②の繰り返しは、相手の話を聞いていないと繰り返せないで、やり取りにほどよい緊張感が生まれた。正しく聞き取ろう、聞き取れなかったら聞き返そうとする姿勢が見られるようになった。
- ・Small Talk の進め方では、私自身英語で話すことに苦手意識を感じていたが、英語を話すことにチャレンジしていることを示すことが大切とのことで、考え方を変えていくきっかけとなった。

最初の記述には、実際に対話方略を活用して Small Talk をした結果が具体的に述べられている。「相手の話を聞いていないと繰り返せない」という指摘は、実際に授業で実践したことで得られた気づきである。また児童が「確かめ」の対話方略を使用した様子も述べられている。このような児童の変容を細かく把握できるのも教師の資質として必要なものだ。

2 つ目の記述には教員の意識の変化が述べられている。英語力に不安があっても、教師が挑戦する姿勢を示すことは小学校英語教育においては大変重要である。

5. 結論

本論では、明海大学での小学校教員研修における Small Talk に関する研修内容と受講生の事後アン

ケート、リフレクションシートや感想の内容を質的に分析することで、小学校英語教育における Small Talk の役割を考察した。

まず、先行研究からは児童の動機づけを高めるためや、児童が主体的に英語でコミュニケーションを図ることを目指して Small Talk を活用していることがわかった。

また、文科省のガイドブックでは、Small Talk の役割として、(1)既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、(2)対話の続け方を指導すること、の 2 点を挙げている。そこで筆者が講師を務めた教員研修では、既習表現の定着を図るための具体的な方法を模擬授業で紹介したり、対話を続けるための「対話方略」を指導した。その結果受講生たちは「対話方略」の重要性を認識し、今後の授業で具体的に活用したいという記述をリフレクションシートに残していることがわかった。

自身の英語力に不安を持つ小学校教員は多い。「講座内容が学校現場のニーズと合っていたか?」という質問に 94% が肯定的に回答したことから、英語で対話を続けなければならない Small Talk に対して苦手意識を持つ教員も多いことがわかる。しかしこの度の研修を通じて、リフレクションシートの記述にも見られたとおり、対話方略や相槌などを活用することで授業改善に取り組む教員が増えることを希望する。

引用文献

- イーオン. (2019)「小学校の英語教育に関する意識調査 2019」https://www.aeonet.co.jp/company/information/newsrelease/pdf/aeon_190902.pdf (2021 年 2 月 23 日閲覧)
- 内山寿彦・染谷藤重. (2019).「小学校外国語における児童の動機づけを高める授業実践——効果的なスモールトークの使用——」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』第 10 号, 51-59.
- 柏崎秀子. (2008).「省察できる教師を目指したメタ認知能力の育成の試み」『実践女子大学文学部紀要』51, 36-46.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則. (2019).『英

- 語教育用語辞典第3版』東京：大修館書店。
- チェン敦子・村上加代子. (2013). 「小学校英語活動における教員の意識調査」『神戸山手短期大学紀要』56号, 45-50.
- 疋田かおり・田中妃登美. (2018). 「児童が主体的に英語でコミュニケーションを図る授業作り——小・中学校の系統的な学習を踏まえた言語活動の充実を通して——」滋賀県総合教育センター.
<https://www.shiga-ec.ed.jp/www/contents/1549588248539/files/ronnbunn.pdf> (2021年2月23日閲覧)
- 日吉信秀. (2017). 「スモール・トークの活動方法に関するアクション・リサーチ」『中部地区英語教育学会紀要』46巻.
- 文部科学省. (平成29年3月). 『小学校学習指導要領』
- 文部科学省. (平成29年7月). 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』